

## 小林多津衛先生をお訪ねして — 会員の会員訪問記 —

「思い立ったが吉日」、師走の一日、妻とともに小林多津衛先生を長野県望月町のお宅にお訪ねした。

先生との出会いは一九八〇年の「夏の集い」だから、もう八年前のことになる。その後一度お宅にお訪ねしたことがあり、さらに先生の地元小諸で開かれた集りでもお会いしたが、一昨年のも昨夏も「集い」を欠席してしまったので、ぜひお目にかかりたいと思っていた。そこへ先生ご発行の『協和通信』

**第27・28合併号が届き、いよいよこれ**をもって終刊になるという。また添え状によると、秋ごろから足の具合がわるく歩くのに不自由しておられるとあったので、お礼少々お見舞い申し上げたいと思ったのが、先生訪問を思い立った理由である。

信州は美しい軽井沢の雪景色と、雄

大な浅間山が私どもを迎えてくれた。

そして望月町のバス停から十分余、協和部落の先生のお宅に着くと、先生と菅沼君江さん（先生の秘書役として一切の事務を引受けておられる、友の会会員）が、部屋を暖かくして私どもを待っていて下さった。その時から、帰りの小諸行きバスが出る三時半までの五時間程が、私どもに許された「饗宴」の一と時であった。

まず長い間の『協和通信』ご発行のお礼を申しあげた。『通信』は一九八一年三月の創刊、毎号必ず孔子の「学ぶにしかず」と、「学びて思わざればくらく、思いて学ばざればあやうし」の言葉が掲げられている。第一号の巻頭論文は「生涯学習について」であるが、この通信の趣意といい、先生のご日常そのものといい、まさに学ぶことと思

うことに尽きる。その内容は広く美と真実の追及から、きわめて現実的な平和促進のための政治的方策にまで及ぶ。民芸を語り、教育を論じ、政治を批判し、世界平和達成の理想を謳う。

学ぶ人に老いることはない。語る先生の顔はいきいきと輝き、その声には張りがあつて、とても九十二歳の老翁とは思えない。

ちょうど昼近く、ご家族（長男ご夫妻）のご好意で、本当の信州そば（すなわち、そば粉だけのそば）、有名な佐久鯉の洗いと唐揚げ、すべてお宅の畑でとれた野菜の煮物と漬物という心のこもった大ごちそうに舌鼓を打ちながら、先生のご健康の秘訣を伺ってみました。お答えは「玄米、菜食。よくかんで食べる」。それに近くに住む大木昭八郎氏（『体とつきあう』（日本エディタースクール出版部）の著者）の指導によるヨガ体操だという。しかし先生は、健康法も先生らしく「これ絶対」という

のでなく、ごく自然に自分に良いと思われるものを取入れておられるようにお見受けした。

先生は十三年前に睦子夫人を亡くされていられる。その追憶集『さつき』に、「一番強く思うことは、病気に對する知識がなかったこと、日常の注意と努力が足りなくて、母さんを急逝させてしまったことです」と書いておられる。あるいは奥様に対する深い愛情が、先生の最善の健康法であるのかも知れない。

ところで、先生が自ら炊かれる小豆入り餅米玄米御飯は実においしい。私もはごちそうになったほかに、おみやげにまでしていただいて帰ってきた。

しかし、先生の若さは体だけのことではない。いやむしろ心の若さだ。先生の健康の本当の秘密は、日々学ぶこと、考えることにこそあるのだろう。そして学ぶことは謙虚な人へのみ許される特権である。

先生は、あらゆることへの深く広い造詣と、その進取の気象から、折々に人の驚く新しい提案をなさるのだが、いつも「どうぞご示教下さい」と読者に訴えることを忘れられない。私どもと話しておられても、時折耳に手をかざしながら、実によく未熟な若い者の言うことに耳を傾けて下さるのである。

さて午後の話は専ら平和の問題をめぐるのであった。

昨夏の熱海での集いで、先生が力をこめてゴルバチョフの『ペレストロイカ』を賞賛、推薦されたことは、友人たちから伝え聞いていた（『第20回夏のつどい記念特集』参照）。『通信』今号には、それが詳しく論じられている。

先生はそこで、くり返し「成心を去って素直にこの本を読んでみよ、そしてゴルバチョフを信頼し、その誠意に応えよ」と勧めておられる。これを讀めば「ソ連の脅威」などというものは幻想に過ぎないことがわかる。そうす

れば日米安保体制のような軍事同盟は何の意味もない。今こそ日本人が日本国憲法の平和主義を表裏なく実行し得る好機ではないか。人類の運命と地球の安全を考え、核のない、軍備のない世界を実現しよう、と訴えておられるのである。先生の平和を切望するその熱気が伝わってくるような、『通信』最終号を飾るにふさわしい論稿である。

先生のこの熱意溢れる平和論の基礎には、先生が人類の師と仰ぐアルベルト・シュワイツァー、ロマン・ロラン、マハトマ・ガンディー、あるいはエメリー・リーヴスらの平和の哲学がある。先生はこれらの先覚に学ばれて、自分の平和思想を構築してこられた。そしてその具体化は『赤十字国家の提唱』に集約される。これは始め一九七〇年に発表されたもので、要するに日本は赤十字国家になるべきだという主張である。「日本の安全を守るのに軍事力に頼るのではなく、むしろそれに使う膨大な費用（防衛費）を医療費に振りか

え、世界中に大規模な医療班を送って、世界の平和を維持、推進する原動力になろう。赤十字の旗のあるところ、人類の苦悩を癒すことに画期的に努力する国を攻撃する国はない」。

その後も先生はこの問題を「一人静かに調査研究して」、「時務を知る」と、  
「とに議論を補強し、経済学者森嶋通夫氏の「ソフト・ウェアによる国防論」、政治学者坂本義和氏の「核時代の国際政治のあり方」、憲法学者小林直樹氏の「第九条論」などを援用してその射程を拡げ、実に多角的に（例えば国家論、文化論なども包含する）、世界の恒久平和と、人類の生存と（核廃絶）、地球の安全の確保（原子力発電その他環境汚染の問題）の理念および方策を説いておられるのである。（『美と真を求めて』（用美社）所収）

ここ二、三年先生のお心を占めていることは、日本国憲法の平和主義を堅持し、世界連邦の実現を目ざし、第九

条を表裏なく実行して森嶋教授の国防論を生かすような政治を行う政党をぜひとも出現させたいという願いであるようだ。日本にガンディーのような人が生れないものか。もし真実の人がひとり立上れば、日本はなだれを打って変るのではないかと夢みられる。

私は「では先生は例えば政党を組織するとして、どなたか具体的に意中の人がおありですか」と伺った。先生は二、三の人の名を挙げられた。

話は政治から教育のことに移って、菅沼さんも加わって、現代の教育がいかに荒廃しているかを共々に嘆いた。そのような現実を考えると、「ガンディー

ーのような人」の出現も難かしいが、たとえそのような人が出たとしても、日本人がその人に信従して先生が望んでおられるような方向に変わるものか。むしろ私は、それこそ「なだれを打って」戦争勢力の方へ従っていったしま

述べた。

先生は、「武藤さん、そう考えてはいけない。もっと物事を楽観的に考えなさい。シュワイツァーも世界人生肯定の倫理と楽観論的世界観を説いているではありませんか」と言われた。私は先生のご議論に殆ど全部賛成なのだが、その実行、その実現の可能性ということになると、とても先生のように楽観的になれない。そこで「でもシュワイツァーは、『わたしの認識は悲観的であるが、意欲と希望とは楽観的である』と言っています」とお答えしたのであった。

先生のこの若々しい、純粹、素朴な楽観主義に接すると、さすがの私も大いに勇気づけられるのだが、いったいこの先生の楽観論はどこから来るのであろう。私には、それは先生が若き日に出会った「白樺」にさかのぼるよう

に思われてならない。先生はいわゆる信州白樺派教師のひとりであられ、「白

樺を憶う」という一文の冒頭で、「私は満九十歳になり、過去、現在を思い『白樺』から受けた恩恵を深く思います」と述懐しておられる。

私は全く不案内のだが、「白樺」は「自己を生かす」ことをその本旨とすると言っているだろう。先生はこの「白樺」をただひとすじに生きぬいて来られた。それは、先生の尊敬するトルストイ、ロラン、ラッセルなどにも通ずる崇高なヒューマニズムである。

先生の場合、それにシュワイツァーの「自己完成の倫理と献身の倫理」、ガンドイーの「サティヤーダラハー真理の力」の思想の影響が加わって、「赤十字国家の提唱」のような、きわめて現実的な平和の実践へと先生を導いたと言えるのかも知れない。もう二十年も前の作だという長詩の一節に、次の言葉がある。

人間が他の人間の上に爆弾をおとす  
そんなことが  
平気でできる人間がいていいものか

生きようと切なる願いをもつ人々  
こんな願いにかこまれて  
生きようとする自分

○

自己を生かし  
他を生かす  
人間の悲願のすべては  
そこにかかっているのではないのか

○

へ人間の業の深さへなどといって  
良心をごまかし  
何もせず  
傍観していいものなのか……

先生は知の人であるとともに、実行の人なのである。その先生から見ると、「友の会」はどうも行動に消極的すぎるとご批判があった。

ところで、先生は何であられるよりも民芸の専門家である。しかし、その日はついに民芸のお話を伺う時間はなかった。

私どもはかつて四年程前にお訪ねした折、先生の貴重な蒐集品を、先生ご自身のご案内で逐一見せていただいた。陶磁器千点余、染織品・竹草工芸品など五百点余、そのほかに書籍、版面等多数ということである。これらをしかるべき場所に収納して公開できるようにしたいという計画があつて、現在菅沼さん方によって目録化が進んでいるという。なお蒐集品の一部が『美と真を求めて』に写真で紹介されている。

(この本については、『ランバネ』第101号に野上寛次さんの紹介がある)

性来粗野で、およそ美というものに疎い私にも、先生の説かれる民芸の心は幾分なりとわかる気がする。民芸の心は民衆の心だからであろう。民芸は生活の表現であり、手仕事の美しさである。そして先生は民芸の中に「民衆の力」を見出し、民衆の平和への願いを見る。一見何の関係もないと思われる民芸と平和運動が、先生の中では実に見事に、しっかりと結びついている。

先生の民芸論は先生の平和論の内実と言ってもよいだろう。（「民芸と世界平和」、『通信』第19・20合併号所収、参照）。

せっかく先生にお目にかかったのだから、あれも聞きたい、これも伺いたい。迫る時間を気にしながら、思いつくまま伺ったことの一つに天皇のことがあった。先生は淡々と「天皇も私たちみんなと同じ普通の人です。ふつうの人間としてお生きになったらいいし、私たちもふつうの人として天皇をみるべきだと思う」と言われた。

最後の話題は「信仰」のことであった。実はこれが今回の訪問を思い立ったもう一つの理由であった。昨年私は親しい信仰の友人を病気で亡くした。その友人について一文を書いたので、その友人と同じ信州人であられる先生にお目にかけたところ、思いがけず実に身に余るご懇篤なコメントをいただ

き、大いに恐縮した。そのお礼の意味もあつての訪問であつた。

先生は言われる。「私は内村鑑三先生のお話を一度お聞きしたことがあります。内村の影響を受けて信仰に生きていらつしやる野村先生や、松田(智雄)先生を尊敬しています。またシュワイツァーやガンディーのような信仰の人を仰ぎながら、内村先生やその他の信仰の人をうらやみながらも、私自身は若き日に会った柳宗悦や武者小路実篤の生き方に魅され、自由人として生きることを願って、かすかながら美と真実を求めて生きて来ました」と。

そして私に、「あなたのこの文章を読んで、これは信仰の人でなければ書き得ない尊いものである」と言っておき

つた。私には何よりもこの「自由人」という言葉がずしんと心に響いた。先生は謙虚に信仰の人を敬愛しつつ、しかもご自分はどこまでも自由人として、信仰からも自由に、自由人の自負に生き

ておられる。これをしも真の「自由人」と言うべきであろう。そして「自由人の偉大と栄光を思った。「成心なきこと、学徒たること、真摯卒直なこと、一と筋であること、行動の人たること、つねに未来的、希望的、かつ理想に対して樂觀的であること」などなど。シュワイツァーは言っている、「自由人であるかぎり、かれはあらゆる機会を求めて、生命を扶助して生命の苦しみと破滅とを除去する、という至福をあじわうのである」。

そして、この真の自由人から、他に何はなくとも、「信仰人」と呼んでいただいたことに、この無骨な信仰人は大いに感激し、感謝したのであった。

あつという間の五時間だった。先生のご健康を祈り、再会を約して、別れを惜しみつつ辞去した。外に出ると、師走の浅間おろしはさすがに冷たかったが、上気した頬にはそれがとても快かった。

(一九八九年一月二十八日記)

(所載)

『ランバレネ』第一〇八号

シュワイツァー日本友の会

一九八九年三月